

13歳のときにカラヤンに見い出され、天才少女としてセンセーショナルなデビューを飾って以来、世界のトップ・アーティストの道を歩み続けてきたヴァイオリンの女王、ムターが3年振りの来日を果たし、今回、Kitaraのステージに初登場します。まさに“女王”の名にふさわしい、圧倒的な説得力とスケールの大きさ、知性と深い情感を併せ持つ、歌うヴァイオリンの魅力をじっくりとご堪能ください。

また女王に逢える

奥田佳道（音楽評論家）

女王に逢える。3年ぶりに逢える。艶やか、華やかなステージ・プレゼンスに抱かれる私たち。

目に浮かぶ。胸ときめく。喝采が早くも聴こえてくるかのよう。ヴァイオリンを聴く喜びは、やはり晴れ舞台が似合うアンネ＝ゾフィー・ムターによって満たされるのではないか。

選り抜かれた、といういつもの褒め言葉では表せない「思慮深く、しかも美しい」プログラムが用意された。彼女の輝かしい歩みを映し出した音楽が並んだ。聴こえてくるのは芸術的な信条、言うなればパフォーミングアーツの粹だ。

ピアノの序奏からして味わい深いモーツァルトの二重奏ソナタと、音楽への内なる尽きせぬ想いがついに溢れ出たかのようなシューベルトの奇蹟の幻想曲は、やはり大人による本物の演奏で体感したい。いずれもヴァリエーションが鍵を握る。となれば、女王ムターと彼女のヴァイオリンを知り尽くしたオルキスの出番である。2006年2月にミュンヘンで録音されたモーツァルトのソナタ選集の素晴らしさを挙げるまでもない。ロマンへの憧憬に満ち、大胆な転調も名技性も魅力となる歌人シューベルトの「幻想曲」を、どうぞお聴き逃しなく。

近現代の作曲家と交歓し、創造の喜びを分かち合った女王ムターの姿も明らかにされる。2013年に生誕100年を迎えるポーランドの名匠ルトスワフスキ(1913～1994)のヴァイオリン芸術は晩年、ムターの演奏に触発され、さらなる高みに達した。ズッカーマンに捧げられ、ムターのために改訂された佳品「パルティータ」とは、ほぼ緩む選曲だ。

流麗な楽想も小気味よさもお任せあれのサン＝サーンスのドラマティックなソナタ第1番(1885)がプログラムを締めくくる。昨今の彼女の流儀だ。興奮を誘ってやまないアレグロ・モルトの「グランド・フィナーレ」まで、アンネ＝ゾフィー・ムターは、もちろん女王であり続ける。

アンネ＝ゾフィー・ムター（ヴァイオリン）

ANNE-SOPHIE MUTTER, Violin

アンネ＝ゾフィー・ムターは、およそ30年もの間、現代における最も優れたヴァイオリニストの一人として活躍している。

ドイツのバーデン州ラインフェルデンに生まれ、1976年のルツェルン国際音楽祭で国際舞台にデビュー。翌年、ヘルベルト・フォン・カラヤンとの共演によりザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭にソリストとして出演。以来、ヨーロッパ、米国、アジア各地のあらゆる主要なホールで演奏。伝統的な名曲の演奏に加え、常に新しいレパートリーを開拓し聴衆に紹介しており、それらには室内楽と管弦楽の作品が同じ割合で含まれている。

ムターは、セバスチャン・カリーア、アンリ・デュティユー、ソフィア・グバイドゥリナ、ヴィトルド・ルトスワフスキ、ノルベール・モレ、クシシュトフ・ペンデレツキ、サー・アンドレ・プレヴィン、ヴォルフガング・リームら現代作曲家のヴァイオリン作品にも特別な関心を持っており、「アーティスト・イン・レジデンス」を務めるニューヨーク・フィルの2010/2011シーズンでは、リーム、グバイドゥリナの協奏曲（ニューヨーク初演）を含む3つの異なるプログラムを予定している。

ムターの膨大な録音は、ドイツ・レコード賞、レコード・アカデミー賞、フランス・ディスク大賞、国際レコード賞、および複数のグラミー賞など、数多くの賞を受賞している。2010年には、オルキスとの共演による、ブラームスのヴァイオリン・ソナタ全集がドイツ・グラモフォンよりリリースされた。

ムターはまた、自らの名声を、慈善プロジェクトや、才能に恵まれた若手音楽家たちの育成のために役立てており、2008年に「アンネ＝ゾフィー・ムター財団」を設立、若手音楽家たちの育成支援など精力的に活動をしている。

国際エルンスト・フォン・シーメンス音楽賞、ドイツ連邦功労勲章一等、バイエルン功労勲章、オーストリア科学・芸術功労十字賞、フランス芸術文化勲章オフィシエ等、多数の賞を受賞。2010年にはトロンハイムのノルウェー科学技術大学から名誉博士号を授与された。

© Harald Hoffmann / DG

ランバート・オルキス（ピアノ）

LAMBERT ORKIS, piano

室内楽奏者、現代音楽の表現者、またピリオド楽器奏者として、国際的な名声を得ているピアニスト。故ムスティスラフ・ロストロポーヴィチと11年以上に渉り共演。1988年よりアンネ＝ゾフィー・ムターのリサイタルでピアニストを務めている。

ワシントン・ナショナル響の首席鍵盤奏者。同響の首席奏者によって結成されたケネディセンター・チェンバー・プレイヤーズの設立メンバー、スミソニアン博物館キャスル三重奏団の設立メンバー及びフォルテピアニスト。

リン・ハレル、アンナ・ビルスマ、ハンナ・チャン、ジュリアン・ラクリン、エマーソン弦楽四重奏団、カーティス弦楽四重奏団などと共演する傍ら、ソリストとしてロストロポーヴィチ、スラットキン、デ・ブルゴス、ヘルヴィッヒを始めとする数々の指揮者と共演。ジョージ・クラム、リチャード・ワーニック、ジェームズ・ブリモシュなどの作曲家がオルキスのためにピアノ・ソロ作品を書いている。

フォルテピアノ及びピアニストとして数々のレーベルで録音を行い、このうち数作品はグラミー賞にもノミネートされている。ドイツ・グラモフォンより発売されているムターとのベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全集でグラミー賞（最優秀室内楽演奏賞）、2006年のモーツァルトのピアノとヴァイオリンのためのソナタのDVDで“Choc de l'année” 賞を受テンブル大学エスター・ボイヤー音楽カレッジ教授。

Anne-Sophie Mutter
Violin Recital

20世紀の偉大な作曲家の一人、ルトスワフスキがムターの演奏に触発され、オーケストラ版を書いて捧げた傑作「パルティータ」。

ポーランドの作曲家ヴィトルド・ルトスワフスキ(1913～1994)が書いた、ヴァイオリンとピアノのための作品「パルティータ」は、作曲家自身も代表作の一つとして認めている傑作として知られています。作品はセント・ポール室内楽オーケストラが当時音楽監督を務めていたヴァイオリニストのピンカス・ズッカーマンとピアニストのマーク・ナイクルグのために委嘱し、1984年に作曲されました。二つの世界大戦、侵略による国土の分割、冷戦下のソ連による共産主義支配など激動の時代を生きてきたルトスワフスキは、政治的抑圧の中にあっても自らの作曲技巧

を磨き上げ、独自性溢れる多くの優れた作品を残しており、力強い生命力と情熱に溢れたこの作品も聴く者を圧倒する深い感銘を与えてくれます。ルトスワフスキは、自身の作品を演奏するムターに触発され、1988年に「パルティータ」のオーケストラ版を作曲、ムターに捧げています。同年ルトスワフスキ自身の指揮によるムターの演奏でレコーディングもされ、以来、この曲は急速に知られるようになりました。

ヴィトルド・ルトスワフスキ(1913～1994)

